

深甚なる敬意を表する次第である。

(L. Carrington Goodrich (editor), Chaoying Fang (Associate editor): Dictionary of Ming Biography 1368—1644, 2 vols., The Ming Biographical History Project of the Association for Asian Studies. New York & London, 1976, xxvi, 1751 pp.)

李光濤編

## 明清史料癸編

神田信夫

私は曾つて『明清史料の統刊』(『駿台史学』第八号所載 一九五八年)と題する一文を草し、戦後台湾に遷った中央研究院の歴史語言研究所において『明清史料』の戊編と己編が新たに編輯刊行されたことを紹介すると共に、それに先立ち中国科学院編輯として丁編が刊行されていることにも触れた。丁編の編輯が中国科学院の名になっているのは、既に上海の商務印書館で印刷に附され完成しかけていたのを中華人民共和国に接収されたからである。従つて実際の編輯は丙編までと同じく中央研究院の歴史語言研究所であり、書物の体裁も扉と奥付の外は異るところがない。戊編は一九五三年三月から翌年八月まで約一年半にわたつて十冊が刊行され、己編は

五七年六月に第一本から第六本までの六冊、ついで翌年四月に第七本から第十本までの四冊が刊行された。その後、一九六〇年四月から十二月にかけて庚編十冊、六二年六月に辛編十冊、六七年四月に壬編十冊の刊行をみた。もともとこの年月は扉や奥付にみえるもので、壬編の末尾に李光濤氏が記されている謝辞には「中華民國」五十六年(一九六七)九月十四日」の日附があるから、壬編が実際に刊行されたのはやや遅れたのかも知れないが、ともかく爾後八年を経て一九七五年八月に至り、癸編十冊が新たに完成したのである。

『明清史料』は言うまでもなく、中央研究院に所蔵されている、清の内閣大庫にあつた檔案を整理編輯して鉛印に附し、線装本十冊ずつを一編として刊行したもので、各編には十千の字号が冠されている。一九三〇年九月に初めて甲編の第一本が発刊されたが、このたび癸編全十冊が刊行されたので、甲編から癸編まですべて百冊が完成したわけで、まことに慶賀に堪えない次第である。

中央研究院が内閣大庫の明清檔案を入手するまでには、いろいろ紆余曲折があつたが、ともかく一九二九年に北京の午門の西翼楼上においてその整理が開始されることになった。爾来、今日まで既に半世紀にちかひ。いったい内閣大庫の檔案が外部に流出し、その一部が中央研究院の所有に帰した経緯や、北京でその整理が開始された当初の情況などについて

は、夙くから諸氏によって述べられているが、比較的新しい詳しい記述として一九五九年に刊行された『明清檔案存真選輯初集』の序がある。これは中央研究院研究員李光濤氏の筆に係り、同氏こそ一九二九年以来今日に至るまで、一貫して檔案の整理編輯に全精力を傾注してこられた方である。がんらい北京で整理されていた中央研究院の檔案は、一九三六年日本軍の華北侵入の危険が増大し時局の切迫するに際し、主要なものを扨んで百箱に詰めて南京に遷された。その後、日中戦争の間、この百箱の檔案は奥地を転々とした末、戦争が終ると一度南京に戻ったが、まもなく中共軍の征覇により台湾に遷って現在に至っている。李光濤氏はこの長い苦難の時期を終始檔案と行を共にされたのである。私は過去十余年間に何度か中央研究院を訪ね、その都度同氏にお会いし、ご好意により檔案の実物をいろいろ見せて頂いた。二階建ての歴史語言研究所の棟のすぐ裏手にある平屋の建物が檔案の保管場所である。そのなかで李氏の指揮のもとに整理の仕事が進められていたが、そこへも案内され、檔案の整理や編輯には並々ならぬ労苦と非常な根気が必要とすることを痛感させられたものである。人生の大半をこの任務に捧げてこられた李光濤氏に、あらためて心から敬意と感謝を表したい。

さてこのたび刊行された『明清史料癸編』は、これまでの諸編と扉の形式がわずかに異り、歴史語言研究所の「史料叢

書」という文字と編者名が新たに記されているが、それ以外は従来と全く同じ体裁である。すなわち第一本から第十本まで全十冊で、各冊目録二、三葉と本文一百葉より成り、本文はすべて一千葉となる。第一本から第三本までの三冊は明末の檔案であるが、殆どが残稿で、「上欠」「下欠」と注記されているものが多く、文中の文字にも空白になっている部分が少ない。これまでの諸編にも残欠のある檔案が収録されているが、これほど多いのは初めてである。というのは明末の檔案は、比較的完全なものは既に収録を終え、残欠の甚しいものにも整理が進んできたからであろうか。檔案の各件ごとに編者が附けられた標題をみると、兵部から出したものが割合多いが、首尾ともに欠いた檔案には「内有『被水西擊去逼他同反』残稿」というように、文中の主な字句を抽出して示している。第一本所収の檔案の年次は天啓四年から崇禎九年まで、第二本は同年から十三年まで、第三本はそれに引き続いて十六年までである。

第四本以下はすべて清の檔案である。第四本は題本や掲帖などで、初めの方の題本には残欠のあるものが十点ほどある。檔案の年次は、康熙二十一年から同治十年まで二百年の長年月にわたっている。第五本は啓本、題本、掲帖、奏本、移会などで、順治元年から十六年までの順治年間ものが五十件ある外はすべて乾隆朝のものばかりで、乾隆元年から十六年

までの分である。第六本は乾隆十六年から五十四年まで、第七本は同年から嘉慶十二年までの分である。第八本はすべて八十一件の檔案の内、四件が奏摺である以外は、すべて六部の各部の移会で、奏摺も二件には「移会抄件」と注記されており、嘉慶元年四月から六年四月に至る。第九本も第八本と同じく、「移会抄件」と注記されている奏摺四件の外はすべて移会である。年代は第八本に引き続き嘉慶六年四月から七年五月までで、わずか一年一ヶ月の期間にすぎない。第十本は上諭、奏摺、題本が若干あるが、やはり殆どが移会で、嘉慶七年から道光十八年までの分である。

『明清史料』はこのたびの癸編の刊行によって全百冊が完成したのである。しかし癸編には序も跋も全くないので、今後さらに従来通り刊行が継続されるように思われるけれども、その点明らかでない。まだ未公表の檔案が残存しているのであれば、やはり引き続き鉛印に附して刊行して頂きたいと思う。今や明清史の研究は、根本史料として檔案を利用せずには済まされぬ段階に立ち到った。その意味からできるだけ多くの檔案ができるだけ速かに公表されるのが望ましいわけである。

そもそも一九三〇年九月に刊行された『明清史料〔甲編〕』の第一本の巻首にみえる「発刊例言」によると、当時歴史語言研究所長であった故傅斯年氏は次のような趣旨を述べてい

る。すなわち先ず研究者に原史料を提供するのが急務であるから、檔案全部の整理が完了するのを俟たないで、整理されるごとに随時印刷に附してゆく。そして最後には数十冊或いは百冊以上になるであろうが、全部完成した後に、分類目録、分類索引、人名索引を編成して、この『明清史料』の刊行を完結するというのである。当初の予定では、十年以内には完結は無理というようであったが、途中戦争や内戦に遭遇して大幅におくれ、四十五年を経過して漸く百冊の完成を迎えたのである。

なお『明清史料』は、戦前に刊行された甲、乙、丙の三編と戦後上海で刊行された丁編など既に入手困難になっていたからであろうか、一九七二年三月に甲編から戊編までの五編のリプリント本が出版された。もとの線装本を洋装本A5版に改めて、各編を三冊に分けているので、すべて十五冊より成り、台北の維新書局の発行である。同年九月にはこのリプリント本について、湯成沅氏の編する『明清史料索引』が同書局より刊行された。僅か五十四頁の小冊子で、檔案各件について、それを発した機関名や人名を筆劃順に排列し、該当する冊次と頁数を挙げた簡単なものにすぎない。しかしこの程度の索引でさえもなかなか有用である。私は前に『明清史料』が已編まで刊行された時にも述べたのであるが、今や百冊ともなると、各冊の巻首の目録を検するだけでも容易でな

い。癸編が完成したこの機会に、ともかく百冊分について当初予定されていた分類目録、分類索引、人名索引などが作成されるならば、学界を裨益するところ極めて大なるものがあるろう。関係者諸氏のご苦勞は察するに余りあるものがあるが、是非実現されるよう念願して已まない。

(線装本十冊、本文一、〇〇〇葉、目録二三葉、中央研究院歴史語言研究所、中華民國六十四年八月)

エスリゲールクリヤシュトルヌイ、イールウッサンブ

## ウルゲーヘム地域における

### 新発見のルーン体文字銘文

護 雅 夫

#### 一

一九七〇年夏、イールウッサンブ (U. Sambu) を隊長とするソ連科学アカデミー・サヤントウーヴァ考古学調査団第四隊は、ウニク山脈 (Ujinskij xrebet) の南斜面、ウルゲーヘム川 (r. Ung-Xem) の右岸で調査に従事した。このウルゲーヘム川に流入する一支流テミルスグ川 (r. Temir-Sug) の渓谷中、その合流点から一・二キロメートルの地点に、スキタイ、フーンサルマート、キルギズ時代のクルガン群からなる墓地がある。そして、そのテミルスグ川の第三段丘上、

批評と紹介 護

東・南・北の三方を山麓につづく丘で囲まれ、西方の河流にむかって開けた窪地に、一つの石碑が発見された。この石碑 (一・四五×〇・五×〇・二メートル) は暗紅色の砂岩製で、その広い西面は南北にむき、せまい東西にルーン体文字の銘文が刻されている。

本碑文は、現在、クイズイル市 (q. Kyzyl) のサヤントウーヴァ考古学調査団基地にあるが、クリヤシュトルヌイ (S.G. Klyastorny) は、サンプルとともに、その銘文を解説し、さらに、とくにイェニセイ諸碑文に施されたタムガの性格に関する自説を発表した。以下、この両学者の見解を紹介し、それに関する私の意見は、別の機会に譲りたいと思う。クリヤシュトルヌイは、ほとんど毎年モンゴル人民共和国内部で野外調査を行ない、ルーン体文字碑文を新しく発見しては解説し、または、既知の銘文を再検討し、その成果をぞくぞく発表している。私は、本碑文をもふくめて、ルーン体文字碑文に関するクリヤシュトルヌイの新説にたいする私見は、これを別にまとめて開陳したいと考えている。

#### 二

さて、本銘文の冒頭、石碑の下端から〇・三メートルのところはタムガがあり、これにつづいて、一〇個の大きいルーン体文字 (大きさは〇・〇五—〇・〇八メートル) がたてに